

## 第27回ミツバチ科学 研究会に参加して

和田 依子

私は、今回初めての研究会に参加した。人影もまばらな休日のキャンパス。だが、講演会場の中は熱気に満ちていた。教室からあふれんばかりの参加者は、ざっと見回してみて300名近くいただろうか。私は係の人に空いた場所を探してもらい、やっと席に着いた。

午前中の研究報告で興味深かったのは、佐々木哲彦先生による玉川大学で始まったミツバチの遺伝子研究の概要だった。先に佐々木正己先生からGBI棟（遺伝子解析・脳イメージング施設）の紹介があったことを受けて、その具体的な内容をわかりやすく説明された。

私はこの研究がただミツバチを人間の生活に役立てるための実用的研究ではないことに興味を覚えた。ミツバチの遺伝子を解析することは、人間の脳のしくみを理解することにもつながるといふ。以前、人工知能学会の研究者がさかんに昆虫をモデルにしてAIロボットを制作し、「知能」の意味を模索していたことをふと思い出した。ミツバチ研究が、人の脳を解明する手助けになるなんて！ 今後どんな発見が生まれるのだろうかと期待で胸がいっぱいになった。

午後の研究報告で参加者がもっとも期待を寄



会場は立ち見が出て、隣の教室をモニター室としていたのは、おそらく五十嵐友二氏による「はちみつ中の異性化糖混入と検出法標準化への取り組み」という講演だったと思う。ある参加者は、「これを聞くために大阪から新幹線で来た」とも言っていた。だが、講演内容の中心は、陽性対照品の確立法という、検査する側からの手法を巡ってのかなり専門的な話だった。養蜂業界は、異性化糖の問題に本当に頭を悩ませている。講演後の一般質問の中からも、出口が見えないこの問題への苛立ちを感じとれた。多くの養蜂家、ハチミツ業者がもっと具体的でつこんだ議論を求めているのではないかと思う。

今回の特別講演は、ニュージーランドのコンビタ社のビル・ブラック氏による「ニュージーランドの養蜂産業」についての話だった。講演で、「ハチミツ総生産量は8900t」、「3千人あまりの養蜂家のうちプロは20%」などと養蜂の興隆ぶりが数字で示されると、会場からは溜息まじりのどよめきが起った。講演後の質問は、マヌカの木栽培法で盛り上がった。多くの養蜂家が常に好奇心を持ち、新しいテーマにチャレンジしている姿が印象的だった。講演後、



業者による出展も人気があった



ミツバチ関係書籍の販売は学生が担当



好評を博した佐々木哲彦助教授の講演



今回の目玉発表だった五十嵐氏の講演



質問に答える池野氏



ブラック氏（右）とコンビタ社の面々

ニュージーランド政府が養蜂業に対して具体的などのような支援をしているのかブラック氏に質問してみた。すると、養蜂技術の専門教育を積極的に行っているとのことだった。資格証を発行し、適切な養蜂を行っているか検査官が見回りもするそうだ。我が国を振り返ってみると、行政が養蜂技術を振興するという話は耳にしない。高齢化の今だからこそ、養蜂業の人材育成の必要性があるのではないかと感じた。

今、あらためて研究会を振り返ってみて思うのは、この研究会がいかに多様な参加者に開かれたものであるかということだ。実際にミツバ



懇親会で

チを飼っている養蜂家、ハチミツ販売業者、健康食品関連業者、ミツバチ研究者、そして私のようなただこの世界に興味があるだけの人間。同じ講演を聴いても、おのずと知識や理解がちがってくるので、講演者はとても気を遣われることかと思う。質疑応答や討論会では多くの参加者から手が上がったが、時間切れで終わる場面が多かった。私自身、続きをもっと聞きたかった参加者同士の討論がいくつかあった。

もしも可能ならば、今後の研究会では、参加申込者にはあらかじめ講演内容の資料を送付（あるいは紹介）していただき、発表はそれを補うとしてはどうかと思う。また、質問事項もあらかじめ参加者から提出してもらい、総合討論ではそれをまとめたいくつかの方向性のもとに進行するなどの工夫があれば、もっと充実した研究会になったかも知れない。いずれにしても、素人の私にとっても、十分刺激的で数々の出会いがあったすばらしい研究会だった。感謝とともに研究会のさらなる発展をお祈りしたい。

(〒547-0047 大阪市平野区平野元町 8-15-601)